

平成27年度 第9回 総合教育会議

- 1 日 時：平成27年12月26日（土）10:45～11:55
- 2 場 所：県庁 講堂
- 3 出席者：三重県知事、三重県教育委員会（5名）
三重県教育委員会特別顧問
事務局＜戦略企画部＞
部長、副部長、ひとづくり政策総括監、戦略企画総務課長
＜教育委員会事務局＞
副教育長、次長(教職員担当)兼総括市町教育支援・人事監、
次長(学校教育担当)、次長(育成支援・社会教育担当)、
次長(研修担当)、教育総務課長、教育政策課長、保健体育課長
ほか

4 質 疑

◆戦略企画部長

定刻になりましたので、ただ今から、第9回の総合教育会議を開催させていただきます。

開催にあたりまして、知事からご挨拶をお願いします。

●鈴木知事

おはようございます。今日は12月26日ということで、2015年も後6日という大変押し迫ったときに、総合教育会議を開催させていただきましたところ、委員の皆さんにはお集まりをいただきまして本当にありがとうございます。今回で9回目の総合教育会議ですが、既に全国で一番多く総合教育会議を開催しておりますので、回を重ねるごとに最も多い回数になっていくわけでございます。

今日は子どもの体力向上についてですが、その前に、土曜日の授業について少しお話させていただきます。

土曜授業の実施率が公表になり、市町教育委員会、県教育委員会、学校現場、多くの皆さんのご協力によりまして、非常に高い実施率になりました。数字が好きな私が独自に試算をしましたところ、どうやら小学校、中学校で全国1位の実施率になったようですので、大変ありがたいと思っています。

一方で、議会から、いろいろな検証をして、より効果的になるようにということも言っていただいております。いずれにしても、どんなチャレンジであれ、取組であれ、全国の中でも先進的に取り組んでいる地域が増えていくことは、教育現場また県民の皆様の「やればできる」という思いに繋がると思いますので、大変うれしく思っています。

今日は子どもの体力向上のお話ですが、今年度の体力テストにおきましては、全体としては、小学校男女と中学校女子は全国平均を下回る道半ばの状況ですが、中学校男子が調査開始以来、初めて全国平均を上回ったことや、全国平均を下回った小学校の男女、中学校の女子につきましても、調査開始以来、合計点が最高

値を示したということで、全国との差が最も縮まるという明るい兆しも見えております。

種目別に見ても、34種目中、14種目が全国平均を上回りました。去年は8種目でしたので、ほぼ倍の種目が全国平均を上回ったことになり、これは学校、家庭、地域の取組の成果だと思っております。

特に三重県においては、平成30年にインターハイ、平成32年に全国中学校体育大会、そして、平成33年に国体と全国障害者スポーツ大会を控えておりますので、体力、運動習慣の裾野の拡大は大変重要と思っております。

さらに、子どもたちが未来を切り拓いていくため、体力、心身ともに健康であるための体力向上にこれからもしっかりと取り組んでまいりたいと思っております。

とはいえ、課題もまだまだたくさんございます。今日、皆様にご議論をいただき、次なる取組に進化させていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

◆戦略企画部長

それでは、議事に入らせていただきます。

本日の議題は、「平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果概要・分析と今後の取組」です。事務局から説明させていただいた後、意見交換に移りたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

◆教育委員会事務局次長(育成支援・社会教育担当)

資料1に基づき説明させていただきます。2ページ下段の折れ線グラフのとおり、各学年男女とも、合計点は毎年着実に上昇しており、中でも26年から27年は全国トップクラスの伸びを示しています。

3ページでは27年度の調査結果等を児童生徒質問紙及び学校質問紙から、(1)学校全体での取組、(2)授業の工夫改善等の取組、(3)家庭・生活習慣の取組、(4)その他の取組の4つに分類し、それぞれの成果と課題について考察を行っています。

また、分析にあたっては、主な質問ごとに①全国との比較、②昨年度との比較、③相関や上位県、伸び率の高い県との比較、の3項目で比較をし、改善した点と、更に改善を要する点を④のまとめとしております。「1 学校全体での取組の成果と課題」では、本県が重点として取り組む「学校での目標の設定」「1学校1運動の取組」「体力テストの継続実施」の3本柱の成果を検証しております。(1)学校全体での目標の設定については、26年度の目標設定の状況を問う質問になっております。

4ページの帯グラフのとおり、本県の目標設定率は小中学校とも全国を大きく下回っておりますが、平成27年1月から、県内すべての小中学校で各学校の体力向上の目標や取組を記載した「みえの子ども元気アップシート」を作成することから、調査が行われた27年4月時点の実施率は、この結果よりかなり上がっていたと考えられます。4ページ下段の表のとおり、福井県、茨城県などの全国上位県では目標設定率が高く、また、合計点との相関関係も見られます。今後すべての小学校で今回の調査結果を分析し、新たな目標設定を

行い、体力向上に向けて取り組む必要があると考えています。

5 ページ「1 学校 1 運動」の取組について、26年度の本県の取組率は、小学校では全国平均を下回っていますが、中学校ではやや上回りました。本県では、平成27年1月から各学校において1 学校 1 運動の取組をするよう働きかけています。6 ページの下段のグラフは27年度の状態ですが、本県では、1 週間の総運動時間が60分未満、あるいは、運動を全くしない児童の割合が昨年度より減少していることから、1 学校 1 運動の取組が徐々に浸透してきていると考えられます。

また、6 ページの中段の表ですが、上位県では取組率が高く、また、体力合計点との相関も見られますので、各学校において、体力向上の目標に向けて1 学校 1 運動の取組が効果的に行われるよう、引き続き、働きかけていく必要がございます。

7 ページ、体力テストの継続実施です。6 年以上、体力テストを継続している学校の割合は、小学校では全国平均値を下回っておりますが、中学校はほぼ同程度です。昨年度に比べ、小学校で16.3ポイント、中学校で2.1ポイント増加しております。上位県では継続実施率が高く、小中学校とも継続実施をしている場合は、合計点との相関関係も見られます。今後もすべての小中学校の全学年において、体力テストが継続実施をされるよう取り組んでいく必要があると考えます。

9 ページ、「2 授業の工夫改善の取組の成果と課題」では、「楽しい授業の工夫」「授業のめあてと振り返り」「本調査結果を踏まえた授業の工夫改善」などについて検証しております。(1)「体育の授業が楽しいか」という問いに対して、「楽しい」と答えた割合は、全国と比較して小中学校とも高く、また、「楽しくない」割合も全国より低いことから、本県の児童生徒は、体育の授業を比較的肯定的に捉えていることが伺えます。10ページの棒グラフをご覧ください。「楽しい」と答えた児童生徒は、明らかに合計点が高いことから、体育の授業が楽しいと思えるような、より一層の工夫改善が必要です。特に楽しいと考えている比率が低い女子児童生徒に対しては、重要な視点であると考えます。

11ページ、授業の「めあて・振り返り」の実施状況は、小中学校ともに全国平均を下回っております。しかし、昨年度と比較しますと、改善傾向が見られます。体力合計点と授業の「めあて・振り返り」の実施状況に顕著な相関関係は見られませんが、上位県では、「めあて・振り返り」の実施率が高くなっています。学習効果を高めるために、児童生徒が目標を持ち学習を振り返ることは大切であり、より一層取り組んでいく必要があると考えます。

13ページ、「26年度の調査結果を踏まえて授業改善等を行ったか」という問いに対する本県の取組状況は、小中学校ともに全国平均を若干下回っていますが、26年度の調査結果のCDの活用、学校内における結果の全職員への情報共有については、全国を上回っております。上位県においても工夫改善の取組率が高く、体力合計点と本質問には相関が見られます。各学校が本調査の結果を積極的に活用し、授業の工夫改善を行うことは、今後の取組を進めるために重要な視点であると考えます。

21ページ、「3 家庭・生活習慣等の取組の成果と課題」では、「学校の児童生

徒に対する生活習慣の働きかけ」「学校の家庭に対する体力向上の働きかけ」「朝食の摂取や就寝時間」などについて検証しています。(1)生活習慣改善の働きかけについては、今年度に体力テストを受けた児童生徒に対し、「26年度に生活習慣の改善の働きかけをしましたか」という問いです。小学校では全国平均を上回っておりますが、中学校ではやや下回っています。自主自立を育む指導の観点から、学年が上がるごとに生活習慣の改善に向けた働きかけが弱くなっていると考えられます。

上位県では取組率が高く、特に小学校では体力合計点との相関も見られます。生活習慣の改善は、体力向上のみならず、生活習慣病の予防などの健康面においても必要なことであり、更に取組が必要と考えます。

23ページ、(2)家庭に対しての子どもの体力向上の働きかけについての質問も先ほどと同様に昨年度の取組について聞いており、小中学校ともに全国平均を10ポイント以上下回っています。全国と比べると、本県は体力向上に係る家庭への働きかけが弱いため、今後、体力向上に向けた家庭への啓発を積極的に進める必要があると考えます。体力向上は、家庭・地域とも連携した取組が必要です。このため、本県では各学校が児童生徒の体力テストの結果を経年で見るができる「私の成長の記録」を活用するよう働きかけていますが、より一層の取組が必要と考えています。

25ページ、(3)朝食の摂取について、毎日食べる割合を全国平均と比較すると、小学校はわずかに低くなっています。26年度調査にこの質問項目がなかったため、25年度調査との比較になりますが、毎日食べる割合は、小中学校とも減少傾向にあります。一方、食べない割合は、若干ですが小中学校とも改善傾向にあります。26ページ中段の棒グラフをご覧くださいと、小中学校とも明らかに毎日食べる子どもが優位です。また、上位県における朝食摂取率は高く、小中学校とも体力合計点との相関が見られます。

27ページ、(4)就寝時間について、小中学校ともに全国平均とほぼ同程度ですが、「日によって変わる」という割合は、小中学校ともに40%程度あります。体力合計点との関係を見ますと、就寝時間が日によって変わる子どもは体力合計点が高い傾向にあり、特に小学校では男女ともに体力合計点との相関関係があり、上位県では「決まった時間に寝る」割合が高いことから、規則正しい就寝を継続していくよう働きかけていく必要がございます。

また、28ページ、一番下の棒グラフをご覧くださいと、6時間未満の睡眠時間の児童生徒は体力合計点が高いことがわかります。そのため、睡眠時間についても、十分確保するよう、家庭に働きかけていく必要がございます。

33ページ、(1)地域の保育所や幼稚園との連携について、27年度に小学校が幼稚園等と連携した取組のうち、34ページ下段の棒グラフをご覧くださいと、体力向上の取組を行った割合は、全国平均を上回っております。具体的な取組で一番多かった内容は、「幼児を小学校に招き児童と一緒に運動する」でした。体力合計点との顕著な相関は見られませんが、上位県では取組率が高いことから、更なる取組が必要と考えています。

35ページ「Ⅲ 総括」です。これまでの体力向上の取組により、小中学校の体力向上の取組が進んできており、三重の子どもたちの力が徐々に現れ始めてきたかと考えております。しかし、上位県との比較分析では、3つの重点取組をはじめ、授業の工夫改善や生活習慣の改善等、更なる取組が必要であることが明らかになりました。引き続き、児童生徒の体力向上や就学前の体力づくりに向けて、学校・家庭・地域が連携し、一層の取組を進めてまいります。

「Ⅳ 今後の取組方針」としては、各学校が今回の調査結果を分析し、成果や課題をしっかりと把握したうえで、子どもたちの体力向上に向けた新たな計画を設定し、実行できるよう市町教育委員会と連携して取り組んでまいります。特に、②各学校が体力テストを全学年で毎年継続して実施し、その結果を子どもたち一人ひとりの成長の記録として、生徒や家庭が共有できるよう、市町教育委員会と連携して取り組んでまいります。

④運動や生活習慣に対する意識を高めいただくため、児童生徒や家庭に対して、「生活習慣チェックシート」や「私たちの成長の記録」の活用を積極的に働きかけてまいります。

⑤保育士や幼稚園教諭等を対象とした研修会を開催するなど、幼稚園、保育所等において、子どもたちの体を動かす遊びが充実するよう、市町や関係機関と連携し取組を進めます。

資料1の説明は以上です。

資料2をご覧ください。ご議論いただきたい論点は、「平成27年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果を踏まえ、子どもたちが運動に親しみ、体力・運動能力の一層の向上を図るために、学校、家庭、地域でどのような点に留意して取り組むべきか」です。よろしくお願いいたします。

◆戦略企画部長

それでは、意見交換に移ります。どなたからでも結構ですが、いかがでしょうか。委員長、よろしいでしょうか。

○前田教育委員長

まず、意見を申し上げる前に、この1年、今年の2月から準備委員会も含め、総合教育会議に参加させていただきありがとうございました。年末ですので辛口、本音でいきたいと思えます。

総論的な部分から入りますと、先般、学力・学習状況調査の結果が出ました。その後、体力調査の結果が出ました。私は、学力と体力は無縁ではないと思えます。昔からよく学べ、よく遊べと言います。遊ぶ時間は遊ぶ、体を動かす時間はしっかり動かす、学ぶときはしっかり学ぶというのは、家庭内での生活習慣も合わせて、ライフスタイルの中で抑揚をつけるということですから、あながち無縁ではないと理解しています。

もう一つは、子どもたち自身の生活の中でも言えることですが、県教育委員会をはじめとする三重県内各市町の教育委員会、それから、時々回らせていただく学校訪問などで、学校現場の機運が盛り上がってきているなど感じています。ま

だ完全に一枚岩というところまでは行っていないものの、私が教育委員をさせていただいた当初から比較しますと、随分ベクトルが合ってきたなということを肌で感じております。

では、これから何をするか。学力・学習状況調査も同様ですが、この調査結果について、どこに優位点があった、成果があった、どこが隘路になっているかという分析は必要ですが、私が一番気になりましたのは、それぞれの学校における目標設定の度合いが、全国調査の結果と比べるとかなり劣っていることです。このことは、私は一番目にやらなければいけないことだと思います。いたずらに目標数値の設定をして、学校現場や子どもたちを追い込めということではないのですが、目指すべきところを明確にすることは、先生方にとっても子どもたちにとってもわかりやすく、訴求力があると思います。目標設定がいまだにこの状況ということについては、素直に振り返らなければいけないと思います。

それから、先ほど申し上げたように全体的に上げ潮といいますか、いい機運が醸成されてきたことを肌で感じました。

学校はそれぞれ、校長先生が運営されますが、三重県内統一の、どこの学校へ行ってもこれをするという統一した目標を持ってよいのではないのでしょうか。学校の主体性は尊重しながらですが、三重県教育委員会、あるいは、三重県として何をするのか、何が目標かということ、どこの学校へ行っても掲げてあるような目標を設定することは、今、この盛り上がってきた中では、浸透しやすいのではないかと思います。私が教育委員になった当初のまだベクトルが合っていないときにやるのはどうかと思いますが、機運が盛り上がってきた今だからこそ、県内統一の目標があると、保護者や地域の方にもわかりやすいのではないかと考えております。大変なことかも知れませんが、いいのではないかと考えて、年末の意見として申し上げます。

○森脇教育委員

前田委員長がおっしゃったことに少し敷えんをさせていただきます。

学力・学習状況調査と今回の「全国体力・運動能力、運動習慣調査」から見えてきていることがあると思います。それは、学校が与えられた機能を発揮しつつあり、動き出しているということだと思います。もちろん学校が動くということは、教師が動いているからですが、学力、体力ともに調査の結果が上がってきているのは、学校そのものが機能を発揮しつつあると思います。それは、やはり教育委員会がこれまでやってきた施策が、高校生も含めて間違っていなかったからだと思います。

私は、三重県では上意下達あまり通用しないと申し上げたことがありますが、そうではなくて、エビデンス、説得と納得、参加というこの3つのやり方で、ある程度成果を上げつつあると思っています。

例えば、体力テストをしたか、していないかということがあります。資料1の8ページにあるように、これまで体力テストを何年間していますかという質問の回答が全国は90%に近いにもかかわらず、三重県は6年間以上やっている学校が

まだ63.6%です。しかし、棒グラフの5年間4年間3年間というのが、次年度以降、順次6年間以上になっていきますので、そういう意味で学校が動き出していると言えます。

そのことが体力・運動能力の好結果につながっていると思います。学力調査から見えている地域や保護者への働きかけがうまくいっていないという弱点は、体力も似ているという感じがします。一方で少し違う面もあって、子どもたちが体育の授業を楽しんでいる、あるいは、好きだと言っている子が全国を上回っています。学力はそうではないので、少し違う傾向もあると思います。しかし、楽しいというのは少し危なくて、楽しいからできるということにはつながらない面があるのではないかという気がします。体育の授業のハードルを上げると楽しくない子が増えて、できる子も増えるということが起きてくると思いますが、少なくとも運動の場合は、訓練すればすぐに体力、運動能力が上がるという側面もあります。一方では、運動ができる子と運動ができない子の二極化が非常に進んでしまっていて、できない子がなかなかできるようになれないということが、学力よりも壁が大きいのではないかという気もします。

例えば、6ページの中学校を見るとわかりますが、部活をしている子と全くしない子の総運動時間にもものすごい差ができています。授業が楽しいとか部活をしている子はできるから楽しいかもしれないですが、一方で全然運動しない子たちはできないから楽しくないということかもしれない。このフタコブラクダの差を埋めていくことは、授業ではとても大変なことではないかという気がいたします。

学力の場合は、授業のめあて・振り返りですごく学力がつくという相関がありますが、体育の場合は、体育の授業で、できない子ができるようになったということがどれだけ実現しているかという調査をもっと緻密にやっていく必要があるのではないかと思います。それが学校あるいは授業についてのコメントです。

もう一つは、別の調査で、子どもの運動文化や遊び文化の歴史的な流れが全国的な動向として出ています。1960年の東京オリンピックから50年間の推移を見ているのですが、投てき、つまり投げる力は落ちている。他の力は少しずつ増えているのですが、投げる力が低下している。これは三重県も不得意種目に入っていました。それは投げることで体が子どもたちの運動文化から機会がなくなっている。例えば、ドッジボールをやったりソフトボールをやったり野球やったりということが少なくなっており、そういう大きな流れの中でソフトボール投げという項目を置いておく意味も合わせて問い直さなければいけないと思います。一方で、蹴るサッカー文化が勃興している中で違う項目が必要になっているのかもしれない。

しかし、ものを投げるという肩の力は、人間が生きていくうえで必要だと考えるならば、投げる機会を持つ運動や遊びを盛り立てていく必要があるようにも思います。

スペースインベーダーができたのが78年で、ファミリーコンピューターが83年です。我々の大学生のころのことですが、その頃から遊びが全く変わっていると思います。ですから、今の学校の先生で、80年ぐらいに生まれた人は、路地で野

球をしたという経験もない先生たちです。遊びの環境も激減していますし、その中でどういうふうに遊び文化をつくりあげていくかといったら、学校にはもしかしたら期待できないのかもしれない。ですから、地域で、ある種の遊び文化を継承したり、再構築できる主体をつくったりしていくことが必要なのかもしれない。

行政がそこにどういうふうにかかわるのかという問題がありますが、学校の研修だけで話が進むものでもないような気がしています。そう考えると、遊び、あるいは運動文化は、学校だけではなくて、地域や公共機関を巻き込んだ取組が必要なのではないかと思います。

○岩崎教育委員

森脇委員から地域の話が出ましたので、それを受け継ぐ形で発言をさせていただきたいと思います。今日ご報告いただいた運動能力の調査結果については、既に前田委員長からご指摘があり、森脇委員もおっしゃったように、これから毎年この調査をやっていくところが増えていくわけです。まずは、1学校1運動の取組も含めた3つの取組が、今の段階では成果を上げているという評価はできると思いますし、来年以降も楽しみです。取組結果が下がることは今のところ、考える必要はないと思っています。

一方で、ピンポイントでいくつか課題が出てくると思っていまして、例えば資料1の20ページで、子どもたちが学校の運動部や学校外のスポーツクラブに所属していますかという問いかけに対して、運動部に所属している率が高く、三重県の男子は、地域のスポーツクラブに属していると回答している子どもの数よりも学校の運動部に所属していると答えている比率が高いです。やはり学校でひたすらクラブ活動であるとか授業で運動をやらせているのが現状で、その中でめあて・振り返りをきちんとやっていって、森脇委員がおっしゃるように、できなかった子ができるようになるための目標設定ができると、ますます上がっていくと思います。その分、学校の負担、先生方の負担は増えていくと思います。その観点から、この参考資料2の69ページをご覧くださいとわかりますが、小学校の場合、体育の専科教員の配置が、三重県は常勤、非常勤いずれも全国に比べるとかなり低いです。中学校は専科の教員がいますから、先生方に頑張ってもらいたいという話になりますが、小学校の場合はいろんな科目の授業を全部持っていて、体育もきちんとやっていかなければいけない中で、しんどいと思いますので、体育の専科の教員を少し考えていく必要があるのではないか。

そして、教育委員会に聞かなければいけないと思ったのですが、参考資料2の69ページの下段にあるとおり、体育専科教員が配置されている場合、体育専科教員は単独で授業を担当していますかという質問に対して、全国とは真逆の結果が出ています。これはどういうことでしょうか。専科の教員が少ないということもあるでしょうが、単独では担当しないのが全国的な傾向だとすると、おそらく担任の先生と一緒にやっていることになると思います。ここにもピンポイントで学校の課題が出てきていると思います。

ただ、学校で抱えすぎているところがあるからでしょうか。同じ参考資料の2

の73ページが一番下、ニュースポーツとかレクリエーション的スポーツ活動を行う部活動は全国にもあまりないですが、三重県にもほとんどありません。これは例えば野球とか走るとかについては、中学の場合も部活動では一生懸命やりますが、そういうのは苦手だけれども、何かちょっと体を動かしたいというときには、学校では対応していないということでもあると思います。このように結果を見ますと、地域の総合型のスポーツクラブとどのようにリンクさせていくかということは、とても大きい話のような気がします。

これからの高齢化社会でいうと、健康寿命の延伸なども言われているわけですから、少し鍛えるために、おじさん、おじいさん、おばあさんと一緒にスポーツをやるという話は絶対重要だし、武道は外部講師を依頼せざるを得ない。そのときに子どもと一緒に武道をもう一回やってみようというお父さんと一緒にやるとなると、それは学校ではなく総合型の地域スポーツクラブの役割ではないかと思えます。総合型スポーツクラブを学校教育の中に取り込んでいくというと語弊がありますが、クラブ活動の部分と学校の体育活動の中にも取り入れていく方法は考える必要があるし、お歳を召した方の健康寿命の延伸の話にも繋がると思えます。

また、就学前の子どもたちと一緒にスポーツをやるということも、地域の総合型スポーツクラブなら考えられるのではないかと。それが結果的に保護者への働きかけになっていくかと思えます。これは教育委員会だけではなくて、健康福祉部などと様々な観点で考えていく必要のある部分ではないかと思った次第です。

◆戦略企画部長

参考資料2の関係でご質問をいただきましたが、事務局いかがですか。

◆保健体育課長

三重県では、単独で授業を担当するという事は、言葉は悪いですが、学校で体育の専科教員がいればその先生に任せっきりになってしまっています。他県で、単独で担当してないところはティーム・ティーチングで、担任がいて体育の指導が得意な先生と一緒に授業をする。担任は普段から子どもたちを見ているので、子どもたちの変化を感じ取りながら授業を構築するという授業計画を立てるのが全国の傾向だと思います。

三重県の場合、学校の工夫で専科を置いています、専科教員に任せきりになっているかと思えます。中学校や高校の授業のように教科担任制というわけではないので、小学校では、普段の子どもたちの動きとか仲間づくりの中で授業をすることが大事だと、校長等が助言するポイントだと思います。

○岩崎教育委員

そうですね。こういうピンポイントの課題も少しずつ解決していく必要があると思って資料を見ておりました。

○柏木教育委員

私も資料を見せていただいて、これからの取組の中で全学年に対して体力テス

トを毎年行っていくということがありましたが、それと並行して、生徒質問紙も1年生から6年生まで全学年で行ってはどうか、と思います。子どもたちが、自分が動くことが好きなのか嫌いなのかを見つめることで、保護者も学校も子どもたちのことを知るということに繋がるので、生徒質問紙はものすごく大事だと思っています。生徒質問紙で、例えば子どもたちが5時間寝ていると答えているが、保護者は8時間寝ていると思っている。保護者が子どものことをきちんと知っていないことを指摘されたら、保護者も「うちの子、5時間しか寝ていないのか、なぜだろう」ということになるかもしれません。また、テレビを観たり、ゲームをしたり、インターネット、携帯をしている時間も、保護者が思っている時間と子どもの実際にしている時間の差をきちんと知らなくてはいけないと私は思います。知っているからこそ、うちの子に限って、ということがないようにきちんと保護者も子どもに向き合えるのではないかと思います。

また、県の資料を見ると数字がたくさん並んでいますが、その先には一人ひとりの子どもたちがいて、担任の先生方がいる。担任の先生方は数字を見るのではなくて、子どもたちの顔と一枚一枚の生徒質問紙が見えるわけです。その場合、きめ細かな対応というなら、体を動かすことが嫌いな子どもたちに対しては、声かけもできる。子どもたちの顔が見える担任の方が、いろいろなことができる。忙しい教員の方に膨大なデータを見てというよりも、一枚一枚を子どもたちと共有していくことが必要だと思いますし、家庭訪問に行くときに、そういうデータを持ちながらお宅のお子さんはこちらです、という状態を把握することが必要です。また、例えば、データで出てくるのはパーセンテージですが、朝食を食べない理由はいっぱいあります。保護者がつくってくれない、保護者も食べないという場合もあれば、朝起きられない、体調が悪いという場合もある。どこを改善したらいいかということは、その子どもに対応する大人しかないので、その一つひとつの改善がクラスの改善になって、学校の改善になって、市町の改善になって県まで上がってくるという流れができたらいいいのではないかと思います。

先生方にしても、1学年から生徒質問紙をすることで子どものことが把握しやすいし、それによって学級運営もスムーズにいくのではないかと思いますので、三重県らしさを出しながら三重県独自の児童生徒質問紙をつくって、生活習慣チェックシートとリンクさせながら子どもたちを多面的に見ていけるようにしてはどうでしょうか。データを吸い上げて計算して、相関関係を出すには時間がかかりますが、担任の先生がそれを把握して子どもと向き合うのであれば、朝読一回つぶしただけでもできると思います。県が持つデータと担任が持つデータはニュアンスが違ふと思います。そういうことも一つひとつ子どもたちのためにみんなが見ていくということで提案したらどうかということを感じました。

◇教育委員会特別顧問

今日も大事なお話を伺いました。ありがとうございました。

最初、前田委員長からもございましたが、学力調査も体力調査についても、基本的には無縁ではないのではないかとのお話がありましたが、私もまさにその

とおりでと思います。無縁どころではなくて、まさにこれはリンクしている話だと思います。

細かくいえば、学力調査もそうですが、体力調査はそれぞれ一人ひとりの子どもたちにやらせて、その結果を各学校で集約し、市で集約をし、県で集約し、全国で集約される。それが戻って来て、この場では、県レベルで集約したデータをもとに概括的な分析と方向性なり、改善策を話し合っています。しかし、本来は、一人ひとりの子どもたちを預かっているわけですから、各学校がこの戻ってきたデータをもとにして、柏木委員がおっしゃったように一人ひとりに応じて分析をし、どういう改善をするとこの子はもっと伸びるのかということをやってもらう必要がありますね。それがあってこそ県の話ですが、そこをどのように各学校までつなぐかということ苦勞があるわけです。

そういうことを最初に申し上げた上で、県では学力調査の方向性もそうですし、体力調査もそうですが、やはり概括的にならざるを得ないということです。一つの、でも重要な指標として各市町も学校も受けとめてもらうことにはなりますが、この状況を分析し洗い出していくと、各学校、市町教委の段階での学力の低下、体力の低下は、少しずつよくなっているけれど、まだまだ危機意識が足りないということです。このままでは追いつかなくなってくるかもしれないというつもりで取り組んでもらうためには、相当に支援や指導も必要ではないかと思います。指導というと、はばかりところもあるかもしれませんが、県はそういう権限を持っていますので、その立場で各市町教委や各学校に対して、個々の子どもたちを分析し指導を重ねていく、また、家庭に働きかけていくためのプログラムなり、手引きなり、マニュアルなりを、県が用意してあげなければだめなのかもしれません。放っておいてもしっかりやってくれるところであれば心配ないですが、今までの状況からすると、やはりもう少しスピード感を持って取り組んでもらうためには、お節介かもしれませんが、そういう面でのサポートをして、そのフィードバックをしてもらったり、また、しっかり取り組んでいるところは県全体に取組をPRしてあげたりしながら頑張ってもらおう。分析にしても改善にしても、一種の改革です。私はいつも言うのですが、楽をして改革はできないです。多少の負荷はかかりますが、しっかりやれば、果実は返ってくる、必ずリターンがあります。それをしっかりと信じて取り組んでもらうことについて、各市町や学校に働きかけをしていく。そのために県レベルでの非常に明確な根拠なり、分析結果を提供して、さらに、あなたのところは今後どういう対応を図っていくつもりですか、ぐらいの調査があってもいいのではないかと思います。文書がまずければ聞き取りでもいいのですが、そういう形でやっていく必要があるのではないかと思います。

一つの例ですが、先週の土曜日に山口県で全県大会があり、私もパネラーとして出ました。山口県は、小中学校すべての学校をコミュニティ・スクールにしようとして取り組んでおり、あと10校ばかりを残しているだけです。その大会で県の姿勢が明らかになりましたが、当然、三重県と同じように総合教育計画に位置づけられているということで、市町が18ありますが、県の職員が出向いてフェイス・

トゥ・フェイスで、こういう方針でこういう予算がある、また、こういう課題もあるかもしれないが、どうするおつもりですかとヒアリングしています。そして、どういう面でこれが実施できないのか、どういう問題があるのか、県はどんなことが手助けできるのか、そういう具体的なことを話し合いながら、一つひとつ理解していくという取組をする中で、100%近くに来ているとのことでした。

ですから、残念ながら通知文書とかビジョンを示しただけでは、なかなか動きづらいところがあるようです。これは決してサボっているわけではないと思いますが、真意を理解していただけないところもありますので、もう一工夫、一手間必要かと思った次第です。

三重県の分析もすばらしい分析、労作ができておりますので、これをもとにしなが、各市町や学校に返して、これからの取組について明確な回答を迫っていくことが、事を荒立てないようにしながらできればいいと思った次第です。

○山口教育長

学力、体力は関係性があるということですが、学力調査は小6、中3が対象です。体力調査は小5、中2が対象で、小5、中2の体力調査の生徒質問紙、学校質問紙があります。その結果が1年後の学力調査ではどうなっているのかという経年変化を見ることができないのではないかとということで、今後、このあたりについて事務局でしっかりと推移を把握し、対策をとっていく必要があると指示しているところでした。

2点目、体力については3点、目標設定と体力テストの継続実施、さらに運動時間の確保に取り組んでいます。1学校1運動をすべての学校でやるように計画書を出させて、保健体育課の職員が確認をしています。その中で授業改善が十分でないのではないかとということで、11月に行われた体力向上の優秀校の表彰で、表彰された学校の校長にどのような取組をしていたかと聞いたら、握力計を廊下に置いておき、子どもたちが休み時間にどれだけ伸びたかということをやっている、と。また、体育の準備運動でダンスをやり始めたら女の子が動き始めたというようなことを言う校長先生がみえました。3点に加えて、そういう授業改善をしっかりやっていく必要があるかと思えます。

家庭への働きかけについてですが、生活習慣ができない、特に朝食を食べられない状況があるということは、議会でも家庭が崩壊しているから教育委員会が数値目標をつくるのはおかしいという議員さんがたくさんいます。あるいは、学習ができない子について、家庭環境があるから県の計画の数値目標に置くのはよくないという意見もありますが、私どもは、そういう家庭もあるが、トータルとして家庭にどのように働きかけていくか、できないというのではなく、できないところはなぜできないのかということ、市町教育委員会なり学校と議論をしていく必要があるかと思っております。

そして、貝ノ瀬顧問から助言をいただきました。市町教育委員会なり学校に対して、できない理由に対して、どういう手助けができるかという一工夫、一汗かく必要があると言われました。来年1月から2月にかけて、全小中学校の体育の

教員1人と市町教育委員会の担当者を集めて、来年度に向けての取組や現在の取組についての周知徹底を図っていくこととしています。その後、聞き取りをする中で事務局職員なり体力向上アドバイザーを派遣して確認していく段取りでやらせていただこうと思っております。

4つのうちの1つが平均を上回ったということですが、まだまだやることはたくさんあります。特に家庭への働きかけについて、家庭が崩壊しているから諦めるのではなく、どう取り組んでいくかということが私は大切だと思っております。

◆戦略企画部長

時間的にはそろそろ知事にコメントをいただこうと思いますが、委員の先生方、よろしいでしょうか。

◇教育委員会特別顧問

もう一言付け加えさせてください。体育というと学校体育で週3時間ぐらいありますが、学校体育で体力をすべてカバーするというのは限界があるかもしれません。スポーツという概念で家庭、地域、社会での体を動かす楽しい取組も当然考えなければならないと思います。

そういう意味では、コミュニティ・スクールなどの学校運営協議会が、地域スポーツなり家庭での取組について企画したり、先生方と一緒に働きかけをしたりする場合がありますし、また、独自に取り組む場合もあります。そういう形で地域社会や家庭にも広がっていけば、学校の先生方も努力が報われるのではないかと思います。ですから、すべてみんなつながっているだろうと思います。

同時に、体を動かすことについて、子どもたちが嫌がっていないということは、例えば、ダンスとかよさこいとか、ああいうのはすごく一生懸命やります。やるなどいっても、おもしろい格好をしてやっています。ですから、地域社会において健全な形で取り組んでいけるような施策もありますので、それが一つのきっかけになって体を動かし、スポーツに発展し、また、体力づくりにもつながっていくという好循環につながれば、なおいいなと思っております。どちらにしても、委員の皆様がおっしゃるように学力も体力も各学校だけと限定的に考えずに、地域社会や家庭も協力して同じベクトルでしっかり歩いていく必要がある内容だということを、山口教育長のお話を聞いていて思いました。感想です。

◆戦略企画部長

それでは、最後に知事からコメントをお願いします。

●鈴木知事

今日も貴重なコメントをありがとうございました。

まず、前田委員長がおっしゃっていただいたように、目標設定の割合が低いということについて、子どもたちの運動能力調査の結果ではなく、学校質問紙でやったかやってないかという項目が、やってないということについては課題が大きいと思います。これは体育の授業以外に運動時間の確保をしたかしないか、体力テストを続けてやっているかやっていないかですので、取組をやるかやらないか

という話ですから、委員長からご指摘いただいたように大変課題が大きいと思いますので、まだまだ改善の余地があるかと思えます。

森脇委員と岩崎委員がおっしゃっていただいた地域との関係の話は少しだけさせていただきますが、遊び文化の話はすごくおもしろかったですね。テレビゲーム機の話ですが、私は1974年生まれですので、まさにテレビゲーム機が出てきて、ドンキーコングとかそういうのが非常に楽しかった世代です。よくよく考えると、学力調査の児童生徒質問紙において、三重県はテレビを見るとかスマートフォンを使う時間が長いということもあり、リンクもしているということだと思います。また、学校だけで遊び文化等を取り組むのは難しいという話もありましたし、総合型地域スポーツクラブの話もありました。前田委員長が最初におっしゃっていただいた機運に関連して、県としては、子ども家庭局で「三重の育児男子プロジェクト」をやっていますが、そのプロジェクトで育児男子キャンプという取組をして、お父さんと子どものキャンプみたいなものを推奨しています。また、来年の1月か2月くらいになると思いますが、「三重まるごと自然体験構想」という構想を立ち上げる予定です。これは、三重県のどこが好きですかと聞いたら、「自然」と答える人が結構多いこと、さらにたまたまモンベルというアウトドアの最大手メーカーが、三重県全体を都道府県で初めてモデルフレンドエリアにさせていただいたこともあって、海外からも評価されている自然があるので、それをもっと満喫しようではないかと。ついては、人も呼び込んでしまおうということもあり、そういう遊び文化的なアプローチも重要かと思えます。全体の機運も大事。合わせて、総合型地域スポーツクラブもそうですし、あと、貝ノ瀬顧問におっしゃっていただいたことと同じことを言おうと思っていたのですが、この前、元陸上選手の為末大さんと一緒にトークショーをやりました。その時に、彼も同じようなことを言っていました。体育からスポーツへという話と、日本は運動を学ぶが、世界の運動は楽しむものだという話。運動を学ぶのと楽しむのとでは、そもそもの基本姿勢が全然違っています。例えば為末さんが留学していたイギリスなどは、放っておいても夕方になれば子どもと大人が公園に集まってきて遊んだりするけれど、これは学校の管理運営上の問題があるにしても、小さい子どもでも徒歩圏内に運動ができる環境、これは学校の運動場のことですが、これだけ整備されている国は、世界中どこを探してもないので、もっとそういうところで楽しめる環境があるといいのということも言っていました。今、学校での体力向上の取組をいろいろやらせていただいている一方で、全体の機運づくりもやっていたいかなければと改めて知事という立場において感じたところです。

柏木委員がおっしゃっていただいた親の理解ですが、多分、今年度内には発表できると思いますが、子ども・家庭局でつくっている「三重の子ども白書2015」でも、親の理解と子どもの感じ方のギャップがすごく大きい結果が出ると思います。例えば、子どもが自己肯定感、自分のことを好きだと思っているかということについて、親は結構高く見ていて、自分のことを好きだろうと言うのですが、そこは結構ギャップがあるので、そういう部分も多面的に子どもたちを見ながら、大人みんなで解決策を考えていく取組をやっていければと思います。今日はそう

いう意味ではもちろん教育委員会所管の部分の体力向上や地域、家庭との関係の部分もたくさんご意見をいただきましたが、加えて全体的な県を挙げてのいろいろな機運醸成や取組などの課題についてもご審議いただきましたので、ぜひ、これから全体として改善していくようにしたいと思います。

◆戦略企画部長

それでは、以上で会議は終了させていただきたいと思います。次回は、第10回になりますが、年明け1月下旬ごろに開催をさせていただきたいと思います。お忙しいとは思いますが、ぜひよろしく願いをいたします。

では、以上で会議を終了させていただきます。

以上